慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	J・U・ネフ著 宮本又次他訳 工業文明の誕生と現代世界
Sub Title	
Author	渡辺, 國廣
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1966
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.59, No.4 (1966. 4) ,p.440(88)- 441(89)
JaLC DOI	10.14991/001.19660401-0088
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19660401-0088

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

J・U・ネフ著
宮本又次他訳

『工業文明の誕生と現代世界』

工業文明の特徴を著者は量的なものの追求に置いた。そしてこれが機械の登場により起ったと考えるのであった。機械は大量生産を必然化するわけだが、かかる事態の進展が可能なため背後には大量消費がなければならない。そして著者によれば、消費の大量化を軸に再編された文明の形態こそがまた工業文明でもあった。大量消費に向かうため生産で耐久性を追うことはできない。気軽に取替える便利さが強調された。しかしこのことの結果した事態は重大であった。気軽に取替え、やがてそれが習慣となった時、人々は生活のため掛替えない最後のものまで簡単にすり替え、平然としていた。いかにも落着きがない。大量生産のなかで大量消費が強要され、取替える気安さを基底に生活は忽卒のうちに組立てられることになったのであった。新規のものを追う生活であって、その徹底した場合、生涯で掛替えないものまでいとも気軽に取替えられてしまった。生活の仕組に変化が起り、今やその影響で人々の意識もまた一変してしまったのであった。大量に消費する。とにかくそれをいいとするのである。人々は今日かかる善行に従うべき存在とみなされるにいたった。消費のため人々は働く。しかもより多く消費するため急いで働かなければならない。今や人々は多忙のうちに生涯を終える運命に追込まれてしまったのであった。

工業文明の特徴ということで著者は量の志向を指摘し、その結果する事態の重大性に驚歎するのであった。工業文明の本質は増大する財の量にある。しかし莫大な財の前に、それを享受する楽しみは妨害されるまでになった。今日テレビの普及は驚異に値する。これが人々の忙しさを増すことになってしまった。テレビをみながら食事するあわただしさを想像せよ。かかる行為は食事すること本来の目的すら奪うものであった。大量消費のなかで皆がやたらと忙しい。もはや人々のいらだちをかくすことができない。著者はそうした工業文明に深い疑念を持つ。しかし関心はむしろ現実にそれを存続せしめる条件にあった。そして著者は時間についての観念の大きな変化に注目するのである。かつて時間は何か一つを丹念に完成するためのものとみなされた。しかし今日では同時にいくつかのことを難なく果たすためのものと考えられている。そして著者によれば、かかる理解の変化のなかで人々は多忙を率直に受入れることができたのであった。多忙が工業文明に不可避である時、時間に対する理解のそうした変化が工業文明存立の確実な精神的基礎となることは疑いない。

著者は工業文明をかかるものとして把握した後で、その誕生を可能とした歴史上の諸事象に関説し、とくに関係の程度・仕方について論述する。いってみれば、経済的進歩の条件の確定という問題にもなろうが、著者は宗教変革が投資活動に及ぼした影響を重視し、またこれと並んで投資決定に国家の政策が持つ重要性を強調した。そして他の諸要因については、相互に独立、しかし工業文明の発展の過程では深く関連的と位置づけるのであった。いわば副次的要因になろうが、かかるものとして著者は、科学革命、地理的諸条件、道徳的諸価値を考えていた。富の集積のなかで生産手段の改変が進み、機械の登場となったが、著者にとってかかる富の源流は大して問題にならない。蓄積を組織化し得た要因こそが重要であった。（未来社・一九六三年一月刊・B6・三〇七頁・六五〇円）

—渡辺　國廣—

*　*　*

H・G・ジョンソン著

『岐路に立つ世界経済』

本書は、その副題の貨幣・貿易および経済発展の現在の問題のサーベイよりもうかがわれるように、世界経済が一つの転換点ないし転型期に達し、新しい展開方向が明確化される必要があるという認識の下に、世界経済の現段階を正しく理解し、如何なる問題が存在しており、それがどんな理論的・歴史的背景をもっているのか、そして将来の展開方向は何かをきわめて要領よく展望した小冊子である。

その分析の全体を通じて、著者は経済的論理・合理性にのっとり、基本的に、世界経済においては自由貿易・自由競争の実現・達成が望ましいとする立場から、一つの筋を通して、第二次大戦後の世界経済の発展をたどり、現在の問題点を明確に分析している。

その主要構成は、一、序論、二、理論的・歴史的背景、三、国際通貨機構、四、国際貿易取極め、五、開発途上諸国の問題、の五節よりなる。

ここでは、世界経済を自由世界にかぎっているが、世界経済運営のための理論的前提、第二次大戦までのその歴史的展開をまず明確化した上で、第二次大戦後の世界経済の発展が要領よくのべられ、その上に現在の問題点が解明されているのである。とくに世界経済の問題点を、国際通貨・金融面、国際貿易面、低開発国問題の三つに分け、しかも第二次大戦直後のブレトン・ウッズで、世界経済の再建をこころざした計画者達が樹立した、国際通貨基金（IMF）、関税貿易一般協定（GATT）、国際復興開発銀行（IBRD）の三つの機構と対比して、論究されている点に一つの特色がある。

しかも単なる機構の説明に終らず、戦後これらの機構を具体化した国際経済組織体系の基本原則に即して、現在の問題点が明らかにされているのである。

本書は、著者が一九六四年一二月の初めにモントリオールの大学に招かれて行なった三回の連続講演をまとめたものであるため、非常に明快かつ要領のよい説明がなされているが、逆に理論的な新しさ、深みには乏しい。

そのなかでとくに興味をひかれた点を簡単に列挙しておきたい。一、世界経済における三つの主要グループ（1）、アメリカを中心とするアングロサクソングループ、(2)、EEC諸国、(3)、低開発諸国）の存在を指摘し、これらの経済的、むしろ政治的対立・抗争が、世界経済の展開を左右する要因となっていること、二、国際的な自由貿易・自由競争を支持する論拠は、静態的な資源配分の効率化との関連においてではなく、動態的な成長・発展